方向

第一二九号　一九九一年四月二五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

長吉・李賀　生誕一一〇〇年

1991・4・14　原田憲雄

ことし一九九一年は、李賀、字は長吉、の生誕一二〇〇年にあたる。

かれの生卒年については幾つかの説があり、次の三説が有力である。一、七九〇年生・八一六年卒。二、七九一年生・八一七年卒。三、七九四年生・八一七～八二一年卒。

森瀬壽三氏が昨年十月二十六日、中国河南省宜陽県三郷（唐代の昌谷）を訪い「唐詩人李賀故里」と題した碑とともに写真を撮って贈られた。碑陰に「詩人誕辰一千二百周年」の文字が見えるのは、説一によって昨年をその年とし、碑を建てて記念としたのであろう。さすがは鬼才を生んだ国。杜甫や李白に対するてあつい保護にはくらべものにならなくても、とにかく詩人を顕彰することは忘れていない。碑を建てるのが詩人顕彰の方法としてよいとはいいきれぬ。作品を印刷して広く紹介し、人々が深く味わうための作業を進めることこそ、文学者への最大の礼儀であろう。読みもせずにその名だけを利用するのは、当の詩人もよろこぶまい。

李賀の詩を愛し、そのひとつびとつを深く追究する森瀬氏が、日本の李賀を研究する者としては、たぶん最初の訪問者として、その生誕「一千二百年」に昌谷に足跡をとどめられたことは、きわめて意義ふかく、訪ねたくともかなわなかった同好の祈願を、代って達成されたものといってよいであろう。

説二によって今年を一二〇〇年とするわたしは、心の隅っこでそのことが気になりながら、何もしなかった。父や母、兄弟などの年忌はいとなむが、形を盛んにすることはつねにひかえてきた。おのれの親故より、他の菩提を願い、とぶらうのが、僧となった者の任であろうと思うからである。李賀は、親でも兄弟でもない。しかしわたしには親しすぎて、形をとった記念を唱えるのが気恥ずかしい。これはしかし、余計なこだわりであろう。

一九六七年、数えで七十歳の荊園・齋藤晌氏が、漢詩大系『李賀』を出された。その月報にわたしは「白玉楼中千百五十年」という文章を書いた。李賀の死後一一五〇年にあたったからである。いま七十三歳のわたしは、あの『李賀』ほどの大著を出せそうにないので、一九五八年に書いた「露滴」という拙文を、すこし修補して、ここに転載し、ささやかながら、記念としたい。

露滴

李賀

星くづは　天雲の渚べに　冷え
露しづき　つぶらなり　盤のうちに
なぐはしき花々は　こずゑに　ひらき
衰へし匂ひぐさ　ひとけなき園に　愁ひぬ
よるの空は　玉敷の　みぎりのごとく

池の蓮葉　さながらに　青き銭かも
うれたしや　舞ひごろも　はつかに薄き
ややおぼゆ　花むしろ　臥するに寒き
暁の風いたる　なんぞ　さゐさゐ
北斗星　きらきらと　かたぶきしかな

ほの白い天の川のなぎさに、冷えびえと光をはなっている星。銅盤にしたたってつぶらな露。木々のこずえに美しい花ばな。人気のない園に、むなしく匂う草ぐさ。

夜空は、玉をしきつめた石だたみ。池の蓮の葉は小さくちいさく、丸い青銅の銭をまき散らしたようにみえる。ふけるにしたがって、いつか、夜の気もひいやりとして、思わず、舞いごろもの衿をかきあわす。坐った花もようの竹むしろも、やや肌につめたい。

さっと吹く風には、もう、暁の気配。そうして、いつのまにか傾いていた北斗星の、なんと、きらきらと輝くことか。

酒気に熱した宴席をのがれ、露台にでた舞姫が、思いがけなく見出した、静かにうつくしい夜景を、うたったような詩である。

作者は、楽天・白居易と同時代の李賀（七九一―八一七）である。字を長吉といい、数え年二十七歳の若さで夭折した。詩人が若いうちに死ぬことを「白玉楼中の人となる」というが、これは李賀の死を悼むことからはじまったのである。

十七、八歳のころ、当時の文豪、退之・韓愈に見出され、その推薦で高等文官試験を受けることになった。その第一次試験の答案が「河南府試十二月楽辞」、一月から十二月まで月ごとに一首、それに閏月の一首を加えた十三首の連作で、なかのひとつ七月をうたったのがこの詩である。七月とはいっても、陰暦だから、われわれの暦でいえば、九月の半ばごろにあたるであろう。

わたしの家は、京都は西陣の場末にある。付近は家々がたてこみ、屋根と屋根とがたたみ重なり、夏の太陽に焼けると、たがいに反射し、七月の夜は、ことに、頭がぼおっとするほどむし暑い。この暑さからのがれようとしても、そこに育ち、そこに死すべき、わたしには、他に行くところがない。

そんなとき、わたしは、この詩を読む。ほてった足を、せせらぎに浸すような、ここちがする。

酒宴の席も、売り買いの場も、政治の堂も、およそ、人間のいとなみのあるところは、多かれ少なかれ、むし暑い世界である。

李賀は、この詩を答案として、第一次試験に合格した。だが、かんじんの第二次試験を前に、その才能を妬む者から、あらぬ言いがかりをつけられ、受験を断念しなければならなかった。

それから千年たった。おなじような不合理が、はばをきかせている。いつになっても、むし暑いのが、人間の

世界なのであろうか。

一歩そとに出ると、音ひとつたてない、美しく涼しい世界が存在する。多くの人は、そんな世界に、見向きもしない。

ただ、人間のいとなみのむし暑さに、堪えがたく感ずる人だけが、ふと見出すのが、李賀のうたった夜景なのであろうか。

星依雲渚冷
露滴盤中圓
好花生木末
衰蕙愁空園
夜天如玉砌
池葉極青銭
僅厭舞衫薄
稍知花簟寒
暁風何拂拂
北斗光闌干

星は雲渚に依って冷やかに、
露は盤中に滴って円なり。
好花　木末に生じ、
衰蕙　空園に愁う。
夜天　如も　玉砌、
池葉　極ら　青銭。
僅かに厭う　舞衫の薄きを、
稍や知る　花簟の寒きを。
暁風　何ぞ　払々たる、
北斗　光　闌干。

（一九五八・五・一〇執筆、『大乗』同年七月号掲載）

歌人・大塚五朗（二〇）

1991 4 3　原田憲雄

寝鳥のさやぎ

一九三八年（つづき）　五朗、四十一歳。

『水甕』昭和十三年三月号。

丹波路

日当りの枝うつりつつ鳴く小鳥雪ふりてただにひそかなる山

程近き林に鉄砲の音がして後（あと）はひそけき雪照り（雪光り）の山　（庭三六・丹波路二首）

雪の上に松二三本の影おきて午前十時の日はやはらかき　（〃）

雪の上をかげりて雲はゆきすぎぬ山間に入りて路はひそけき

すがれたる銹沼の葦にふりこもる雪さらさらと日暮時なる

賑はしく子等と夕餐（ゆふげ）をたぶる間も山のひそけさの身に通ひ来る

散るにまかせて久しく掃かぬ庭の面の落葉深きに今朝をおく霜　（庭一九）

み冬づきて深しと思ふ今朝のはれ霜にぬれたる庭石の色

くちなしの実は冴え冴えし霜の朝の寒きいきしてわれは見ほけぬ

月の出てゐる気配ひそかなり（ほのかなり）裏藪に浅夜の霧の沈みそめつつ　（庭一九）

うらやぶ（藪）に寢鳥のさやぎ静まりて夜靄明りの更け沈む色　（〃）

ひそひそと夜靄の底にある月を酔のさめゆくさびしさに見つ　（〃）

四月号。

寒庭余情

音に鳴きて一羽の鳩はひそかなりあかつきかけて霜のむすぶに

霜おきて冴えあかりたる直土（ひたつち）に庭木が落す影鎮まりぬ

霜ぎらひややにはれゆく竹やぶのそよがむ（ん）としていまだひそけき　（庭二〇）

ひそひそと草吹く風の（に）音ありて山のひとところ冬日明れる　兎狩　（庭三七・上賀茂兎狩四首）

張り終へし網を目守りて（まもると）しばらくは山吹く風に心遊ばす（ひそみし山の山風の音）　（〃）

追ひぬかれて久しと思ふ人のこゑすぐそこにして山は明るき　（〃・水甕にはなし）

兎追ふと一日をありて冬山の冬のにほひの身にしみにけり

目の前に小鳥とび立つ驚きもなほひそかなる冬山のはれ　（〃・続風土六〇―八二）

山かげの小田の銹水こほりゐて昼吹く風の音も乾きぬ

貧しさを子等も知ればかこの月より雑誌やめむとその母にいふ　（庭五九・清貧感傷三首・続風土六四・情余）

常ならば雑誌の来る日と夕飯時（ゆふげどき）子は何気なくいひてつぐみぬ　（〃・〃・〃・〃）

貧しかるこの父をさへ一筋にたよらむとする子の瞳（め）と対（あ）ひぬ　（続風土〃）

おのれまづ煙草やめむと二日三日耐へ来てさびし口寒くして　（〃・〃・〃・〃）

五月号。

春浅く

壁にうつる庭木の枝の影さへや豊かに張りて一日明るき

松古りてこもる朝夕（あさよ）の風の音もこまやかにしてむしろさびしき

剪り忘れし庭の芙蓉の古実さへ見るに親しき冬庭の荒れ

吹き荒れし春の嵐の夜に入りてやや吹き弱るうらやぶの音

降り立ちて庭掃き居れば松の樹に松雀鳴きたちて朝の日は澄む

嵐やみてさす日おだしき庭土にこぼれて青き松の葉もあり　（庭二〇）

今更に何ふためくや男らしく書き貫きて来（こ）よと子を送り出す　長男受験（庭六〇・長男三高受験四首）

大丈夫と自信ありげに行きしかど親われの一日物も手につかず　（〃）

髯だらけの受験生もありきとかつおそれかつ憫れむがに子の帰りいふ　（〃）

友の家に碁はうちながら子のことの気にかかりゐて敗けつづけたり　（〃）

この三月、長男朗は京都府立京都第一中学校の四年で第三高等学校理科を受験して合格し、長女喜子は京都市立御室小学校を卒業し、京都府立京都第二高等女学校の入学試験に合格。四月それぞれに入学した。

〈その朗氏が三月十六日入洛、何十年振かでお会いした。お話では、対笠荘は安井東裏町と記憶するとのこと〉

春夢女史の『誰が罪』（四）　1991.4.2　原田憲雄編

第六回

其後岡野は屢々倭文子の許を音れたり何時も彼の話は当時生徒の数は幾人か朝は幾時に起きて夜は何時に息み給ふや書物は如何なる者読み給ふやなどの事なり最早話のなくなりし頃は卒業前の御身さぞ忙がしからんが余り勉強しすぎて体に障らぬ様気をつけ給へとは彼がいつも帰りがけのきまり文句の如く聞へしが信実倭文子が身を案ずれば成可し或時は新刊の和歌集或時は名家の英詩集等携へ来りては彼女に与へ其中の事を云ひ出でゝは話の種となしつ浮ひたる話は露程もなし

世には己れの恋を遂げん為先方の望まざるも強て従はせて得意とする者あり或は先方の己れの心に従はざる時は之を怒り之を恨み反て之が復仇を謀る者あり岡野は是等の恋をいと忌はしく思へり自分は世に我程恋の甚だしき者は無きと思ふ迄に倭文子を愛せり故に倭文子が心を苦しむるを望まず偏へに彼女の身の幸福を願ひけり仮令彼女は我を思はずわが望を納れずとも我は決して彼女を恨まじ怒らじ我愛は変らし彼女は他人の者となり我は一生孤独の身と成り果て我が身を殺さずは到底忍ぶ可からさる苦悶を忍びても彼女の為計らでは神聖の愛とは云はれまじ倭文子が若し自分を愛し居らぬなら世に第一の者として自分を愛せよとは云ひ難し蓋愛せぬものを強て愛せよといふは倭文子を苦しむるに似たりとて彼は燃ゆるが如き熱情を抑へ居りぬ

倭文子は初の程こそ岡野を嫌ふとには有らねど逢ふを厭ひもしつれ終には肉親の者も及ばぬ彼が親切に感じ真の

兄とも頼もしき友とも思ひて彼をいつしか慕ふ様になりけり此は最初の倭文子に比ぶれば聊か岡野が心を慰めしも充分満足を与ふる事能はざりきされどその中には自然と心解け我が望むか如くならんと彼は親が子の成人を楽むが如くに楽めり此の楽み有る為この意中の佳人有る為友人に誘はれ交際上花柳の巷を踏む事あるも決して汚れたる花を手折らんとは思はず唯業なりて倭文子と共に一日も早く卒業の名誉を分たんと思ふの外他意なく孜々克々勉強せしかば彼はいつも試験毎に級中の最高点を占め教師等の信用益々厚かりき斯くて二月も過ぎ三月も中旬となり倭文子には最も忙しき卒業試験は近づきぬ今日は土曜の事とて午后より室に閉じ籠り仲よしの照子と只二人六ヶ敷げなる書物を操ひろげつゝ頻りに勉強なす折から取次ぎの女は岡野の来訪を告げぬ倭文子はこの忙がしいのに気のきかぬ御方と一寸顔を顰めしが忽ち優しき目に笑みを含みて照子が肩を軽く叩き貴嬢鳥渡と会釈し例の応接室に行きて見ればいつも倭文子を見るや否や愉快げに口を開く岡野が今日は如何に為しか無言に控て物案じ顔なり倭文子は先の我独り言のもしや聞えてそれで怒り給ひしには非ざるか頼み無き身を親切に音れくるゝ御方を苟にも厭ひし事の無端さよと何も聞ゆべき筈なき事迄も案じるとは末だ人ずれぬ無垢の心ならんかし是にも気づかず倭文子が今朝穿き変へし雪の如き足袋に紫紺色のブラッシの鼻緒をすげたる二重草履をはきたる足の行儀よく併べる辺を凝と眺め居る岡野の様如何にも今日はたゞならぬに倭文子は思はず

「貴方今日はどうかなさつたのですか」

心配げなる優しき言葉に岡野は心づき無理におしだした様な笑ひ方して

「アハゝゝどうしてですか」

「でも何だか御様子が変でございますもの」
と倭文子は莞爾と笑ふ
「そりあ失敬でした勝手な事を鳥渡考へて居つたものですからアハゝゝ」
岡野は強て愉快らしく猶言葉をつゞけ
「貴嬢方の試験はいつからですか」
「明後日からでございます」
「それでは忙しいでせうにお邪魔を致しましてご迷惑でせう」
倭文子は二階にて岡野に対し呟きし罪を良心に詫ぶるかの如く急に岡野の言葉を遮ぎり
「いゝえちつとも……いつも怠惰ものですから勉強なんか致しやゝしません」
「いつも貴嬢の御謙遜には恐れ入りますなしてご卒業後はお国へお帰りですか」
「はい卒業が出来ますか分りませんが若し出来ますれば長い間父にも逢ひませんから早速帰りませうと思ひます」
「それはお楽しみですなお父様もさぞお待ち兼でせう」
岡野は少し打ち萎れたる調子に力をこめて
「然しお国へ行きいきりじや有りますまい又東京へお出でせう」
「妾は参りたいのでございますが父がもう老人でございますから許してくれますか分かりませんが妾はどうしても東京に永住致したいのでございます」

「それなれば又いつ逢はれますかわかりませんな」
極めて此語は低く震へたり倭文子は兄の如き岡野に別るゝ事は勿論つらけれど長年馴れし学校をやがて離るゝと思へば一層悲しく急に胸苦しくなり無言のまゝ首を下げ指の先もて目の端を抑ゆるを見ればはや玉の涙は瞼より伝〈滴?〉り落ちんとす
岡野は此のいとしき倭文子に暫時なりとも別るゝは実に身を裂かるゝよりつらく悲しきも其より未だゝゝ心安からぬ事あり蓋倭文子が国へ帰らば必ず縁談の話湧きいでゝ彼女が身の定まる事なり若しさる事にならば我は如何にせん倭文子が断然我をいやと云はゞ其迄なるも我心を知らぬ倭文子の心を聞かぬ中人の者となる事のあらばそは一生の恨事否死すとも忘れがたき恨みなりいつそ今彼女の心を聞て見んかさぞ恐れ驚かん早速の返事に窮して小さき胸を苦しめん嗚呼いかんゝゝゝ今迄黙して居りしに急にそんな事はどうもいへぬはてどうしたらと心は無茶苦茶倭文子は此時やつと顔を挙げ
「岡野さん貴方にお願ひ申したい事がございますが…」
此の意味ありげの言葉に岡野はもしやと急に心の雲の晴れし様なりしがいやゝゝ我さへいはれぬ事をこの恥かしがりの倭文子がいかでゝゝゝと又もや雲は元の如く被ひかかりぬ倭文子は尚言葉をつゞけさも云ひ憎そうに
「あのを国へ帰りましたら暇でございますからもう少し文章と和歌位は勉強したいと思ひますが誰方か二週間に一度位で宜しいのですが直してくださるお方はございませんか」
岡野は自分の推察は外づれしが今少し勉強したしとの倭文子が言葉に聊か力を得て

「有りますとも其位の事なら誰でもしてくれますえゝと……誰かをご紹介致しませう」
「有難うございます私も折角これ迄勉強したものですから急には駄目でございませうが其中又東京へ出て今一二年位は是非勉強を致す積りでございます」
倭文子は岡野が案じたるこゝ一二年間の将来の望を洩せり岡野は日旱に雨を得し心地然し今少しく確かな決心を聞きたく
「それは結構です貴嬢はまだお若いですから充分に勉強なさい然しご自分ばかりそうお思ひなさつてもいつまでも独りでお出になったら端でかれこれ囂ましくってそうはいかんでせう」
倭文子は鳥渡顔を赤め
「いいえそれは大丈夫です父も許してあるのでございますから」
「お父様がお許しなさつたのなら確かですなほんとですな」
と嬉しげに倉皇てゝ同じ事を重ねて問ふに倭文子は可笑しく
「偽じやございません確かです」
と笑を袖に隠せば岡野も余り変な事をきゝて倭文子が不審に思ひしならんと羞かしく又可笑しくも有り
「アハゝゝまるで法庭へでもだされた様ですな」
之にて岡野は最早将来は己れの望の如くなりし様な心地して嬉しくてたまらず彼はふと思い出した様に身を起して辞を告げぬ倭文子は鳥渡振返って柱時計を眺め

「折角お出くださつてもちっとも構い申上ません」
「どういたしまして僕が勝手に上がるんで〈す〉からそれではお国へお立ちになる日が極りになったら鳥渡葉書で知らせてください是非お見送り致します」
倭文子は只口の中にてはいと云ひしのみ今日迄の親切を充分に礼を云ひたしと思ひしが岡野がいやに急かゝして居るにその折なくて心すまぬ顔岡野は之に反して非常に愉快らしくステッキの振方にても心の喜びは現れぬ

第七回

難なく倭文子は卒業試験を終へ船路も幸に無事になつかしき故里なる父の許に帰りけり父初め家の者の下へも置かぬ款持振り此上に亡母上の在さばと胸まづ塞りぬ初の日は父の正一と十三になる弟と母に代りて正一の世話なす為来り居る遠縁の者にて家内の人は皆叔母と呼び居る人と 二十年此方忠実に奉公せる下女のお竹と 五人団欒〈欒〉して倭文子が携へ来りし土産物など開きつゝ東京の話に日を暮しける女学生は家政に暗しなどの妄評を受けじとて其翌日より倭文子は早く起きて甲斐〻〻しく昼の中は家の事にのみ心を配り夜は一心に勉強なしけるを子煩悩なる正一は反て之を苦にし今迄長い間一日も朝寝も出来ざりし学校の規則に縛られて居たる身久々にて家に帰りたる事なれば少しはゆるりと寝てもよし家の事は叔母がする掃除は下女がする夜もそんなに遅く迄起きて居ては体の毒になるとの心配かくては余り楽すぎて倭文子の為にはなか〻〻に苦労なるべし親といふものは小供か廿歳になりても三十になりても矢張小供の如く思ひ居るものにて倭文子が余り小供らしき事なしたりと後悔する様な事を父は反て喜ぶに倭文子も結句其方が気楽なれば何時しか学校にありし時の如く小供らしき無邪気の乙

女となりぬ父の外出する折などには弟と共に土産物をと強頼る事あればよしゝと菓子など持ち帰りて同じ様に分け与ふるなど倭文子はいつも親の有難さに涙こぼれぬかくて彼女は世にも楽しく日を送りけり

岡野よりは月に一度は必ず手紙来りたれど倭文子は之を厭ふにはあらねど何となく羞かしくすまぬと思ひながら返事書く気にならで三度に一度位の葉書にてすましたり返事を楽しみに待ち暮らせる岡野には之位の事にては物足らぬ心地さりとて催促も出来ねば独り人の情なきを呟きけり

※　※　※　※　※

旧き年を送り新らしき年を迎へ月日は流水の如くいつしか過ぎて早くも七月の初めとなりけり或る夕方の事倭文子は浴して庭を散歩しける折岡野より郵便来りぬ縁に腰うちかけ鬢の後れ毛を涼風に弄せながら読むに御身を妹と思ひ友とも思ひ将た……学窓に片時も忘るゝ暇なくとある所に来りて彼女は顔を赤め思はず人もやと辺を見廻せり終に岡野は今年いよゝ卒業したれば二三日中に九州漫遊に出かける積りなればその折倭文子が許にも立寄ると書きてありぬ岡野様には兄さんの留守を御存じなれば妾の名を指してお出になる積りかしらん理なしに若き男子が遥々と尋ねくる筈なければお父様も叔母様も変にお思ひなさるであろうお竹も可笑しく思ふだろう岡野様も少しはこんな事はお理りになりそうなもの妾は只岡野様を兄様かお友等の様に思ふてご交際をして居るにあの方はどうお思ひなさつているのかしらんいつそ今から御返事を出して断らふかとても間に合ふ筈はないと倭文子は自烈たそうに側にある南天の葉を拗りては罪なきものを滅茶苦茶に裂きて地にすてけり〈ぬ　ケシノコリ〉

※　※　※　※　※

倭文子は頻りにかの事気にかゝりて面白からねば気を散ぜんとて今日は早く浴なし見晴らし好き二階なる自分の部屋にて手馴れの琴を弾じ居りけるに威勢よく走り来れる車は我か家の前にて止りたれば若しやかの御方かと手を息め動悸高き胸を思はず抑へぬやがて行儀知らぬ田舎者の竹は倉皇しく梯段を登り来り一寸膝をつきて

「嬢様何だか江戸言の人か貴嬢を尋ねて参りました」

「そうかい何といふお方だい男子のお方か女のお方かい」

「岡・・・何とか申しましたっけが忘れましたあの背の高い好男子でございます」

余り無作法な言葉に倭文子は苦笑ひして

「いやな竹だよそんな事大きな声でいふものじゃないよわかつたからお座敷へお通し申ておくれ」

倭文子は先づ父の室に行き

「お父様あのお兄様のお友だちで妾も好く存じて居るお方が尋ねていらつしやいましたので座敷へお通し申て置きましたがお父様もお逢ひなすつてください」

正一は読み居りし新聞を持ったまゝ

「そうかい何といふお方だ」

「岡野一郎といふお方です」

「あゝ逢ひませうとも直に行くからお前先にいってお話申ておいで〈一〉

父も別に何とも思わぬ様子に倭文子はやゝ安心せり別に憎くもなき人それに長い間逢はざりし事なればなつ

かしくも有り羞かしくも有り逢ひ度(たく)も有り逢い度もなく唐紙に手を掛けてはよし暫時躊躇せしが思ひきって開き初対面の人かの如く丁寧に挨拶なすに岡野も同し様(ママ)に会釈す今日は珍しくも倭文子か先(ママ)に口を開きて

「よくこんな所にいらつしやってくださいましたね今日は浪は如何でございました」

「いや酷い目に遇ひました」

その時お竹が持ち来りし烟草盆を倭文子は取りて岡野の前に出すに岡野は衣嚢(かくし)より巻烟草を出しながら

「非常に此(こ)所らの汽船は小さいですな僕は船嫌じやないですが此度ばかりは困りましたさぞ貴嬢などはいつも困りますでせう」

「ほんとに苦しうございます去年などは家へ帰ってから三日ほど病人でございました」

「そうでせうとも実際僕でさへ気分が悪くって不愉快でたまらんでしたからなあ」

「それはお気の毒でしたね調度湯が沸いて居りますからお入浴(はいり)になつて今晩ゆっくりお休になつたら宜しうございませう」

その中父も来りたれば倭文子は之をよき機(しほ)にして立つ

逃げ出した息子

—法華経巡礼　59—　　1991 4 20　原田憲雄

4-8　たとえば、世尊よ、ある男が父のもとから逃げ出したとしましょう。かれは逃げ出し、他の国のある地に

ゆき、かれはそこで多年、離れて住んでいました、二十年、三十年、四十年、五十年も。さて、かれは、世尊よ、大人になりましたが、貧しくて、たつきを求め、食べ物や着物のために、四方八方さまよい歩き、他の国のある地にやってきました。その国には、かれの父親が来ていたのだとしましょう。父は、多くの財産・穀物・黄金・土蔵・穀倉を所有し、多くの金・銀・マニ珠・真珠・瑠璃・シャンカー・シラー・珊瑚・紫金・白銀をたくわえ、多くの下女・下男・召使・日雇いをつかい、多くの象・馬・車・牛・羊をそなえ、大勢の配下を従え、それら諸大国での富豪となり、貯蓄・金融・農業・商業いずれにも繁盛していたのです。

tad-yathā 'pi nāma bhagavan kaś-cid eva puruṣaḥ pitur antikād apakrāmet so 'pakramyānyataraṃ janapada-pradeśaṃ gacchet / sa tatra bahūni varṣāṇi vipravased viṃśatiṃ vā triṃśad vā catvāriṃśad vā pañcāśad vā / atha sa bhagavan mahān puruṣo bhavet sa ca daridraḥ syāt sa ca vṛttiṃ paryeṣamāṇa āhāra-cīvara-hetor daśa⟨W:diśo⟩ diśaḥ⟨W:vidiśaḥ⟩ prakrāmann anyataraṃ janapada-pradeśaṃ gacchet / tasya ca sa pitā 'nyataraṃ janapadaṃ prakrāntaḥ syād bahu-dhana-dhānya-hiraṇya-kośa-kośṭhāgāraś ca bhaved bahu-suvarṇa-rūpya-maṇi-muktā-vaidūrya-śaṅkha śilā-pravāḍa-jāta-arūpa-rajata samanvāgataś ca bhaved bahu-dāsī-dāsa karmakara-pauruṣeyaś ca bhaved bahu-hasty-aśva-ratha-gav 'eḍaka-samanvāgataś ca bhavet / mahā-parivāraś ca bhaven mahā-janapadeṣu ca dhanikaḥ syād āyoga-prayoga-kṛṣi-vaṇijya-prabhūtaś ca bhavet //

ここから始まるのが、『法華経』の七つの譬喩のなかでも有名な「長者窮子（ちょうじゃ・ぐうじ）の喩え」である。天台大師は、この譬喩によって「五時の教判」を立てたといわれ、道元禅師の『正法眼蔵』の「行持」に「真父の家郷に宝財をなげすてて、さらに他国跨跰（れいへい）の窮子となる」というのはこの譬喩をさしている。「跨跰」とはよろよろとさまよい歩くことである。日蓮上人は「開目鈔」「本尊鈔」など遺文の諸処に引用する。また、良寛和尚の詩集『草堂集』は一名「草庵集」というが、この「草庵」が『法華経』のこの譬喩に由来することを、柳田聖山氏が指摘する。

キリスト教の『聖書』「ルカ伝福音書」に「放蕩息子の帰郷」という話があり、これが「長者窮子」の譬喩とよく似ている。そこで『法華経』が『聖書』に影響したのであろうという説があり、反対に『聖書』の話が『法華経』の譬喩に変形されたのだろうという説もあるらしい。その是非はわたしにはつけかねる。もし『法華経』が『聖書』に影響したのだとすれば、「放蕩息子の帰郷」を小説にしたアンドレ・ジイドにまでこの譬喩の影が及んでいることになるだろう。

「多くの財産・穀物・黄金・土蔵・穀倉」は「譬喩品」に出てくることばとほぼ同じで、「信解品」でも以下に繰り返される慣用句である。わたしは先進の用例を参考にしてこのような訳語を選んだものの、「財産」の中に「穀物」と「黄金」は入らないのか。入らないとすると具体的にどう違うのか。といったことが分からない。『法華経』に「金融」にあたる語がみえるからそのような商業の発達した時代に『法華経』が成立したのだろうというような説明は中村元氏の著書で知ったが、さらに突っ込んで、さきに触れたような違いはとなると、分か

らないことが多い。「土蔵」「穀倉」と訳しわけたのも、原語がちがうから分けたまでで、それ以上の説明はわたしにはできない。さきに述べた「七宝」や「都市村落」の一々についても同様である。「一大事因縁」さえわかればいいのであろうが、またそういう考えから、わたしのこだわるような些事には先進の注釈が触れないのではあろうが、些事が具体的に明らかになれば、『法華経』がもっと生きいきと掴めるようになるのではないか。

4-4. さて、世尊よ、その貧しい男は、食べ物や着物を求めるために、部落や、村や、市場や、畿内や、王都をさまよっているうちにだんだん、あの人、多くの財産・黄金・土蔵・穀倉の所有者である父の住む、その村にたどりつきます。そのとき、世尊よ、貧しい男の父で、多くの財産・黄金・土蔵・穀倉の所有者は、その村に住み、五十年というもの、逃げ出した息子を、たえずひまなく想いだし、思いつづけながら誰にも語らないのです、じぶんで悩む以外には。そしてこう考えます。

atha khalu bhagavan sa daridra-puruṣa āhāra-cīvara-paryeṣṭi-hetor grāma-nagara-nigama-janapada-rāṣṭra-rāja-dhāniṣu paryaṭamāno 'nupūrveṇa yatrāsau puruṣo bahu-dhana-hiraṇya-suvarṇa-kośa-koṣṭhāgāras tasyaiva pitā vasati tan nagaram anuprāpto bhavet/ atha khalu bhagavan sa daridra-puruṣasya pitā bahu-dhana-hiraṇya-kośa-koṣṭhāgāras tasmin nagare vasamānas taṃ pañcāśad-varṣa-naṣṭaṃ putraṃ satata-samitam anusmaret samanusmaramāṇaś ca na kasya-cid ācakṣed anyatraika ev-'ātmanā 'dhyātmaṃ saṃtapyed evaṃ ca cintayet /

4-5. 「わたしは、老い衰えた年寄りだ。わたしには黄金・財産・穀物・土蔵・穀倉がいっぱいある。しかし、

わたしには息子というものがなにもない。わたしの命がなくなれば、すべてこれらは受け継がれずに、なくなるだろう。させたくないが」かれは、くりかえしくりかえし息子のことを想い、こう考える。「ああ、わたしは安心するのだが、わたしのあの息子がこの財産の山を受け継いでくれるなら」と。

aham asmi jīrṇo vṛddho mahallakaḥ prabhūtaṃ me hiraṇya-suvarṇa-dhana dhānya-kośa-kośṭhāgāraṃ saṃvidyate na ca me putraḥ kaś-cid asti / mā haiva mama kāla-kriyā bhavet sarvam idam apari-bhuktaṃ vinaśyet / sa taṃ punaḥ-punaḥ putram anusmaret / aho nāmāhaṃ nirvṛti-prāpto bhaveyam yadi me sa putra imaṃ dhana-skandhaṃ paribhuñjīta //

※前号正誤　二三頁一五行　晋という朝　→　晋という朝廷

春の終り

1991 4 18　原田慶

三月二十四日に、昨年十月に亡くなった上田千代さんの法要がいとなまれた。施主は千代さんの生花のお師匠さんとその弟子たちの集いの一樹会である。

花供養とでも言いたいように、焼香台の両脇に、彼岸桜を中心に、黄・紫・朱など色とりどりの花が生けられ、みんなでお経をあげた。その日の法話は「四無量心（しむりょうしん）」ということだった。

四無量は、四梵住（しぼんじゅう）ともいい、四つの広大な心、はかりしれない利他の心をいうのだそうであ

る。その四つとは、慈・悲・喜・捨。一、慈無量は、友愛の心で、衆生に楽をあたえることが無量である。二、悲無量は、他者の苦しみに対する同情で、衆生の苦を無くし救うことが無量である。三、喜無量は、他者を幸福にする喜びで、衆生に楽のあることを妬まないことの無量さ。四、捨無量は、すべてのとらわれを捨てることで、怨めしいとか親しいとかの差別の相を捨てて、平等に利益することの無量さ。

というのであるが、千代さんは、このような心をもつ人だった、という話である。

そう聞けば、ほんとうに裏おもてなく、四無量心をそなえた人だった。すこし頑固なところがあったから、誤解されたことがあったようだけれど、わたしの知るかぎり、決して人々の幸福を妬まず、心から拍手を送り、自分を犠牲にしてでも、他人の苦しみを救おうと努力した。

法要のあとのお花の先生の話では、千代さんという人は、一緒に歩くときでも、前に出ず、すこし後ろをついて歩く人だった。自分がガンの手術を何度も受けて、体の具合がよくないのに、「先生、荷物を持ちましょう」という。「あんたは、しんどいんやさかい、そんなに気を使わんでもいいのんえ」と言っても、「いや、両手に物を持つほうが、釣りあいがとれて歩きやすいんです」と、先生のカバンを持ったという。お花の稽古がすんだ後は、いつも片付け掃除をして帰っていたことは、わたしも知っている。こういうことを、目立たないように、きちんとする人だった。だから、他の人の、自分に対する心使いに対してはたいへん喜び、「あんた、わたしみたいな者にようしてくれるなあ」と、涙をこぼさんばかりにいう。言われる方でも泣きたくなるのだった。

「楽」ということを辞典でしらべてみると、

安楽、たのしい、こころよい、好ましい状態にあって身心が軽やかで安楽なこと。

とある。身体と心は一つのものだから、どちらかが不足しているのはとてもつらい。千代さんは、すこしでも体の調子がよいと、希望がもてるようで、ほんとうに嬉しそうだった。それはガンというような病気をもってみないと、とても理解できないことだと思う。

『広辞苑』（第三版）に、「らく　好むこと。愛すること。」と説明し、徒然草のなかに「楽といふはこのみ愛することなり」とある、と書いてあったので、『徒然草』を読んでみた。どこまで読んでも書いてないなあと思っているうちに、何のために読んでいるのか忘れてしまった。

かしこげなる人も、人のうへをのみはかりて、おのれをばしらざるなり。我をしらずして外（ほか）を知るといふことわりあるべからず。さればおのれをしるを、物しれる人といふべし。……

すべて、人に愛楽（あいげう）せられずして衆にまぢはるは恥なり。かたち見にくく心おくれにして出で仕へ、無知にして大才に交り、不堪（ふかん）の芸をもちて堪能の座につらなり、雪のかしらをいただきてさかりなる人にならび、況んや及ばざるを望み、かなはぬことをうれへ、来らざることをまち、人におそれ人に媚ぶるは、人のあたふる恥にあらず。……（第百三十四段）

肝をつぶすほどのことを平気でいう兼好さんはほんとうにこわい。そのくせどこかにユーモアもある。終りから二段めの第二百四十二段にまできて、思い出した「楽といふはこのみ愛することなり」を。

楽欲（げうよく）する所、一つには名なり。名に二種あり。行跡（かうぜき）と才芸との誉なり。二つには

色欲、三つには味（あぢはひ）なり。…

とある。おなじ「らく」でもさきの辞典のそれとは違う、この楽を無量に与えることは可能なことではない。ふと「俳聖かるた」というものの中の句を思い出した。

蚊帳のうちほたる放してああらくや

これは蕪村だった。楽を与えてくれるのはほたるだろうか。ほたるは光りながら無心に飛ぶ。自分の必要からであっても、誰かに楽を与えようなどとは思っていない。まず自分が楽にならないでは、他人を楽にすることはできないということかなあと思う。『徒然草』はきびしい。さんざん地獄へ突き落とされているうちに、富士正晴さんを思い出した。それで富士さんの『どうなとなれ』という、わけのわからないような話を読んでいたら、楽になった。そして富士さんという人はなんとえらい人やろという気がした。兼好さんの生まれ変りとちがうかなあと思う。きびしい人というのはだいたい面白い人だし、楽そうに見える人は、ほんとうはきびしい人だったりする。「あほらしていかんわ」というあの口調を思い出したけれど、富士さんはもういない。

無量に楽を与え、苦しみに同情し、他人の楽を妬まず、誰にも同じようにやさしく。四無量心なんて、えらいことを聞いてしまった。わたしには、そういうのがすぽっと抜け落ちている。

春の終りは寂しいなあといつも思う。モクレンは散った。ジンチョウもツバキも落ちた。サンシュユは空に吸い込まれたように消え、レンギョウはしぼんでヤマブキは咲きながら散る。千代さんもいない。また雨が降る、青々と若葉ばかりが繁ってくる。